



TITLE:

神戸先生と大学の内外

AUTHOR(S):

蜷川, 虎三

CITATION:

蜷川, 虎三. 神戸先生と大学の内外. 経済論叢 1959, 84(6): 485-486

ISSUE DATE:

1959-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132714>

RIGHT:

經濟論叢

第八十四卷 第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学＝社会科学的認識手段論の
問題点……………大 橋 隆 憲 1

資本主義の運動法則における
論理的なものと歴史的なもの(二)…吉 村 達 次 17

急速税務減価償却をめぐる
所得税会計の保守主義……………高 寺 貞 男 37

ヘンリ・ジョージについての一考察…北 沢 康 男 55

ソースタイン・ヴェブレンに関する
一研究……………中 山 大 68

神戸正雄先生による
再保険特約方式の輸入……………佐 波 宣 平 85

記 事

神戸先生御逝去 ……………91

追 憶 文 ……………96

新村 出 井藤 半弥 本庄栄治郎 小島昌太郎
石川 興二 蜷川 虎三 大谷政敬 小山田小七
堀江 保藏 島 恭彦 松井 清

昭和三十四年十二月

京 都 大 學 經 濟 學 會

神戸先生と大学の内外

嵯 川 虎 三

神戸先生は本当にいい先生であった。そしてまた立派な先生であった。先生を知る者は皆んなそう思っているにちがいない。先生の亡き今日、一層そうした想いを深くし、もっともっと先生に永く生きていて頂きたかったと思われる。

正直なところ、老齡ではあったが先生が病氣になられるなどとは考えられないほどお元気であったし、またご健康でもあった。しかも私などには、先生がいつもご丈夫であるという先入感があった。もちろん先生が正しい生活をつづけられ、およそ度はづれた生活のなかった先生について不健康な一因すもなかったことは事実である。しかし先入感というのは、そんな理くつからくるものではなく、われわれの学生時代の噂では、先生がいつもよいものをたべておられ、牛肉などは一度に百匁以上も平げられるから、あの頑丈な立派なからだができているのだということであった。

浄土寺付近の下宿にいた学生たちの作り話にちがいないのだが、講義は絶対に休まず、経済論義は毎号書き、時事問題研究の個人雑誌を続けられ、しかも財政学の書物はどしどし出るといふのだから、のんきな学生が、そのエネルギー源を、半ばう

らやましさを加えて牛肉と結びつけたのも無理もないことである。神戸先生もずいぶん活躍されたが、あの頃、大正時代の学生生活というのは、勉強もしたが、のんきなものであった。講義なども、先生は熱心なものであったが学生の中には勉強家もいたが殆んど講義に出ないということについては、おのれの自分勝手の理くつがあったのだが、決して通用する理くつでなかったことはいうまでもない。私もその一人で、とうとう小川郷太郎先生の講義をただ一回だけですっぱりかしてしまった。當時は、神戸先生と小川先生とが交替で財政学を講義しておられ、私たち大正九年に入つた者は小川先生の番に當つていたようである。だから私は学生時代にとうとう神戸先生の講義に列する機会がなかった。しかも小川先生の財政学をすっぱりかしたのだから、財政学について今でもひげ目を感じる。

ところが、廻り合せというものは意地の悪いもので、財政学はとに角として、財政問題とは四つに組まねばならぬことが後年しばしば起り、皮肉なものだと独り嘆いたものである。シヤウブ勧告についてシヤウブ自身に私は異論を主張したが、日本の専門家は鳴りをしづめていた。一体、素人が馬鹿正直なのか、いわゆる学者が利巧なのか、どっちにしても黙つていてはわからない。そんなことから、京都府などは、地方財政の谷間に置かれ、救いがたき財政状態におかれている。私はこの十年の報告書を書くとき従来用意して来たが、財政学を学ばぬ者の

地方財政研究を是非とも神戸先生のご批判の下に検討したいと念願していた。今はそれも空しい。

先生の学風は、私がいうまでもなく、きわめて中庸をえたもので、しかも精密な研究と推論を進めたものである。河上先生の影響なども強く、また社会運動の漸く激しくなりつつあった頃の若い者には、ちよつと物足りなかつたことも事実である。しかし財政を問題にし、また財政を研究しようとする者にとっては大きな指導力をもち好指針を与えたことは学界も実業界もよく認めるところである。先生は書かれることはよく書かれたが、そしてまた他人の意見をよく聴かれたが、大いに弁じ、大いに語り、激しく論ずるというようなことはなかつた。

昭和十三年に大連市の事業調査局を先生とともに引受けた私は、大連市との打合せのため日満連絡船で神戸から大連まで先生のお伴をして船旅をしたことがあった。この船中が先生と一番長く、しかもいろいろの問題についてお話する機会であつた。しかも先生としては可成くつろいで話をされたようであつたが、喋るのは私の一方的のもので、先生は殆んど聴き役であつた。しかし、その中で、学問や学問の研究に対するきびしい先生の態度がうかがわれて、私は非常に感激したものである。殊に一部の茶坊主のような教師がいかに大学の研究や教育を害するものであるかということは先生はちやんと考えておられた。また社会や経済あるいは政治における不正義というものを先生はし

っかり見ておられ、これを排除するところに「政策」の問題を考えておられたようである。

このように先生の胸中を察して論文や著書を読んで見ると何気ない表現の中に、当り前の文章のうらに、先生の強い情熱を感じることが出来る。何か芒洋とした。つかみどころのないように見受けられる先生の感じと先生の本質とがひどく違っていることを私はだんだん知るようになった。大きな人間というものは、このような人物をいうのだと自分に言いきかせて私も年をとつて来たが、真似ごとでは人間はつukれない。

先生に親しくして頂き、いろいろ教えて頂くようになったのは、私が京都大学を出て大学に勤めるようになってからである。大学での話はいくらでもあるが、私に強く印象に残っているのは、先生が京都市長の選挙に立候補されたときである。一体、だれが先生をかつぎ出したのか、またどうして先生が引受けられたのか今日でも私はそのいきさつを全然知らない。しかし、私は夜おそくまで先生の演説会場を飛び廻り応援演説をして歩いた。幸に先生は当選したが、市長としての先生に一度も話をする機会がなく終つてしまった。その後、妙なことから今度は私が知事選挙に出る運命になり、知事選挙十年になるが、この間、先生と知事としての話を一度もしたことがない。ただ一度、何かの機会に、「知事も大変だろう」といわれたことがある。先生はそのような人である。そして、だれでも同じように愛し、

同じように面倒を見て、だれからも信頼と尊敬を受けられた。
先生の生涯は本当に立派な学者の生涯であった。